
熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

【Nコード】

N1544Z

【作者名】

ヒイロ

【あらすじ】

不治の病にかかっていた少年が人体冷凍保存で未来へ……しかし、未来は過酷な世界になっていた。

少年はどのように生きていくのか！

アンドロイドあり、モンスターあり、そして男のあこがれ戦車あり！もちろん、ハーレムだつて入れちゃいます！

果たして、少年はいちやらぶできるのか！

プロローグ（前書き）

初めてなのでお手柔らかにお願いします。

プロローグ

西暦2100年、在日米軍の度重なる不祥事に伴い日本政府は在日米軍の排除を決定する。

これを受けてアメリカが抗議行動を行うが、ある日本人の演説により反発運動が各地方で起こり、在日米軍を撤退させた。

撤退した基地は自衛隊の基地に再利用され軍事拡大を行うことに成功する。

在日米軍の排除を成し遂げる事ができた功労者の

「不知火 大蔵」が軍部の最高責任者へ就任を果たす。

この物語は「不知火 大蔵」の息子である

「不知火 和也」が織りなすファンタジー・・・なのかな・・・

雪がちらつきはじめている季節の

とある病室で医師からある病気の告知をされている家族がいた。そう主人公の「不知火 和也」と両親である。

「あなたの病気は現代の科学では治療することができません。また、これから治療を行える可能性は極めて低いと思います」

医師が沈痛な面持ちで話はじめた。

「息子は・・・息子は・・・まだ、18なのに・・・」

和也の母「佐代子」が涙を流しながらつぶやく

「佐代子・・・」

大蔵が佐代子の肩に手をおき慰めように引き寄せる。

「父さん、母さん・・・前からそうじゃないかと思っていたよ・・・」
ため息をつき、和也は話を続ける。

「大学を飛び級で卒業し大学院で博士号もとれた。

父さんの軍部で訓練と戦略、戦術も学ぶことができた。

濃密な人生だったと思う・・・それなりに良い人生だったよ・・・」

「和也・・・私は・・・私は!！」

佐代子は興奮して話す。

「佐代子! 落ち着きなさい! 先生・・・家族だけにして頂けますか・・・」

大蔵が佐代子に強く言いきかせる

「わかりました・・・私はナースステーション近くにいますので終わりましたら

お声をおかけ下さい」

医師はそっくり、病室を出て行った

「和也・・・よく聞きなさい。佐代子も興奮せずに最後まで聞くように」

唐突に大蔵が語り始める

「私は軍部の最高責任者としてあるプロジェクトを行っている。いわゆる人体冷凍保存といわれるものだ」

「和也の病気は現在の医療では治せない。しかし、未来で治せる可能性が

あるかもしれない。私はこれに掛けたいと思う。和也はどうしたい?」

和也は衝撃を受ける。確かに未来なら治せるかもしれない。でも・・・

「父さん・・・それは確実に治るかはわからないよね?」

「確かに可能性は低いかもしれない。でも、0%ではない。どうせ治らないなら

かけてみてはどうだろうか。佐代子はどうだろうか?」

「私は・・・私は・・・和也がずっと苦しむならば、それにかけたい・・・」

「母さん・・・俺の為に考えてくれる両親がいて本当にうれしいよ。」

分かった！父さん、俺もそれで生きることにかけてい！」

「わかった。先生には伝えておく。後で軍部のものがある施設に運ぶから」

「そこで行おう！準備は大丈夫か？」

「俺はいつでも平気だよ！」

「では、すぐに手配を行う！佐代子は先生に連絡を」

「わかりました。先生には私から話を通します」

大蔵と佐代子は急いで病室を出て行った。

病室に静寂が訪れたのもつかの間・・・ノックの音が聞こえる

「どうぞ・・・」

和也はノックを聞いて答えた

「失礼します。軍部から参りました、斉藤 正治と申します。

すぐに移動を開始したいんですが大丈夫でしょうか」

「俺は構いません。持っていくものもないですし、服もこのままで良いのならば」

「問題ありません。では、ご案内します」

病室から病院の出口へと歩き始める。

「これから移動する場所は特殊施設になりますので

関係者以外は入れません。施設のものには触れないでください」

「わかりました。ここから近いのでしょうか」

「はい、入り口で専用の車があります。そこで投薬を行います」

「わかりました。」

病院の入り口に着くと大きなワゴン車が止まっていた。

「どうぞ、お乗りください」

正治はそついい、車の扉を開けて和也を中へ促した。

「わかりました。宜しく願い致します」

和也は車に乗りこむと

「ああ、そうでした。これが例の薬です。水は横にあるので、お飲みください」

「あ、わかりました。では・・・」
和也は薬を服用し・・・そして意識がなくなった

プロローグ（後書き）

メタルサーガなどの設定が入りますが・・似ている世界観と設定と
思っています。また、更新などは遅いと思います。要塞は・・・次
の予定です。

第1話「目覚めたら美女？」（前書き）

すみません・・・要塞までいきませんでした。
まあ、ヒロインは出せたのでお許しただければ・・・

第1話「目覚めたら美女？」

コツコツコツコツコツコツ・・・

無人の廊下を靴の音が響く。

「やっと完成しました・・・」

これがあればマスターのご病気も治ります」

ロングの赤い髪をしたスタイルの良い美女がつぶやく。

「しかし・・・思ったよりも時間がかかってしまいました。

早く人体冷凍保存室に向かい蘇生を行いませんと」

コツコツコツコツコツコツ・・・

「ここまで広いと急ぐときは困り者ですね・・・

何か手を考えませんと・・・マスターにご負担をかけてしまうかもしれません」

コツコツコツコツコツコツ・・・

「あ、ここです。毎日、寝顔を覗いていましたから、

場所は絶対に忘れません。ああ・・・とうとう・・・うふふふ」

人体冷凍保存室とプレートに書かれている部屋の前で

美女が怪しい微笑を浮かべる

「では、失礼します。マスター」

プシューと音がしてドアが自動で開く。

そこには大きい部屋にも関わらず

部屋の中央に一つだけガラス製のカプセルが安置されている

「マスター、お目覚めの時間ですよ」

美女はガラス製のカプセルに近づくと中を覗き込む

「マスター、お待たせしました。もうすぐですよ」

ガラス製のカプセル近くにある透明なプレートに手をかざして何かを入力し始める。

「さあ、マスター・・・」

ガラスのカプセルから白い冷気が噴出し

静かに・・・静かにカプセルが開いていく。

「愛しのマスター、お目覚めください」

美女が怪しい微笑を浮かべガラス製のカプセルを見つめた。

カプセルが全て開ききつたと同時に男性が目を開いた。

「えっ・・・ここは・・・」

男は目を覚まし上半身を起こした

「おはようございます。マスター」

「えっ、き、君はいつたい・・・」

美女の突然の挨拶に男性は驚きながら話す。

「申し訳ございません。私の名前はC I P - 99型と申します。

和也様でよろしいでしょうか」

「えっ？確かに俺は和也だけど・・・どういうこと??」

「私はアンドロイドです」

「あ、ああああ、アンドロイド??えっと人間ではないということかな?

どこからどう見ても、人間しか見えないんだけど・・・」

和也がC I P - 99型を頭の前から足までを見る

「はい、私はアンドロイドで間違いありません。

ですが感情回路が組み込まれておりますので

ほぼ人間と変わりはありません」

「えっ、感情回路??」

「はい、人間と同じように喜怒哀楽ができるように組み込まれた回路です」

「でも、データ通りに動くだけでは・・・」

「いえ、データに基づいて表現されるわけではなく、

人との生活でつかさどったものとなります」

「なるほど・・・ってそれなら違うところはあるのかな?」

「人間と違うところですね。子供を生む事ができない事と

身体能力や知性、記憶力などになります。戦略・戦術・戦闘など

人ではできない行動を行う事が可能です」

「なるほど・・・でも、その名前じゃ呼びにくいよね・・・
CIP-99型ってさ・・・愛称とかはないのかな？」

「マスター、申し訳ございません。私にはそのようなものはありません。」

「そうなんだ・・・では、俺がつけてよいかな？」

「マスターが名前を下さるんですね。お願いいたします」

「では・・・うーん、アテネなんてどうだろう？」

「アテネですか・・・わかりました。これからアテネと名乗らせて頂きます」

アテネからピーピーと機械音になる。

「な、なんだ・・・」

「名前を頂きましたでマスター登録を行います。大変申し訳ございませんが

マスターの粘膜を頂きたいと思います」

「え???どういうこ・・・」

和也が話している途中でアテネが突然顔をよせキスを行う

「なななな・・・なに!!!!??」

「粘膜登録を完了しました。正式にマスター登録完了です」

「え、あ、へ・・・」

「突然で申し訳ございません。正式に登録を行うには

粘膜登録を行う必要があります。キスが一番早く行えますので」

「そ、そうなんだ。で、でも、キスなんていきなり・・・その・・・」

「マスターとキスを行うのに躊躇なんてありませんよ。」

マスターは和也様だけですから」

「そ、そうか・・・でも、びっくりするからさ」

「わかりました。今度からマスターに確認をとりキスを行いますね
アテネが怪しく微笑んだ

「い、いやそうじゃなくて・・・って、そうだ!聞きたいことがある
んだけど・・・」

「はい、なんでしょうか？マスター」

「あ、その前に、マスターは俺だけってどういうことかな？」

「それはマスターがマスターだからです」

「え？どういうこと？」

「それに関しましては、マスターの病気の治療を行ってからでもよろしいでしょうか」

「あ、ということは俺の病気が治るようになったということかな？」

「はい、こちらを投薬すれば完治します。まずはこちらをお飲みになつた後に

詳しいご説明を行いたいんですがよろしいでしょうか」

「わかった．．これで病気は治るのか。父さん、母さん、賭けにはどうやら勝てたらしいよ」

和也はそうつぶやきアテネから薬を受け取り飲んだ

「マスターその薬は即効性なので飲んですぐに効果がでると思います。」

ですが、難点は眠くなる事です」

「え．．．ああ．．．だから．．．」

和也は薬を服用し．．．そしてまた意識がなくなった

「お休みなさいませ．．．マスター．．．」

アテネが怪しく微笑んだ

第1話「目覚めたら美女？」（後書き）

ふむ・・・なんかよく意識がなくなる主人公になってしまいました・
・
誤字とかあるかもしれませんが気にしないでいただけるとありがたいです。

12/6 修正

第2話「俺は一体どこにいたんだ？」（前書き）

要塞の事は出せたんだけど、説明まではいけなかった・・・

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」

「う．．．む．．．」

大きなベットで寝ている和也が寝返りをうつた

「マスター．．．お目覚めですか？」

「う．．．えっ．．．あ．．．夢ではなかったのか．．．」

和也は目を開きまわりを見渡した

「マスター．．．夢から覚めていないのですか？」

でしたら、目覚めのキスが必要ですね」

アテネは怪しい微笑を浮かべながら和也の顔を近づけて．．．

「のわ！．．．ア、アテネ！．．．起きた！．．．起きたから！．．．」

もう大丈夫だよ！．．．ほら！目が覚めているからこんな事できる！．．．」

あわてて和也はベットから起き上がりジャンプしはじめる。

「チィ．．．そうですか。おはようございます。」

マスター、体の調子はどうでしょうか」

「えっ、今、舌打ちしなかった？？」

「何のことでしょうか。マスター．．．耳は大丈夫でしょうか。」

やはり精密検査を行いませんと。解剖とか必要でしょうか」

「か、解剖！．．．いやいやいや！．．．俺は元気だよ！．．．まだ起きたばかりだから

寝ぼけていただけだよ！．．．うんうん、そうだよ！きつと！．．．」

「そうでしたか。では、精密検査は今度にしますね」

アテネは怪しい微笑を浮かべる。

「今度．．．いやいや、精密検査は良いから！本当に！．．．」

「分かりました。問題ないようでしたら良いのです。」

ところで、体の調子は大丈夫でしょうか？」

「ああ、体のだるさなど特にはないね．．．問題ないと思うよ」

和也は腕を動かしたら首を動かしたりして答えた

「そうですか。見た限りでは問題なさそうですね。」

では、マスター大変申し訳ございませんが
脈を取らせて頂いてもよろしいでしょうか」

「ああ、問題ないよ。お願い」

アテネは和也の手をとり、脈を確認する

「マスターの脈を見る限りでは、健康そうですね・・・」

アテネは笑顔を和也に向けると同時に和也の手を自分の方に引っ張る
「のわ！！な、なにするん・・・」

アテネは和也の唇を自分の唇と合わせ、キスを行う

「う・・・ん・・・マスター、ご馳走様です。健康そのものです」

「な！なんでアテネはキスをいきなりするんだ！！」

「もちろん、マスターと愛を・・・健康を確認するためには粘膜を
調べる必要があります、申し訳ございません」

「えっ、今、愛をとかいわなかった？」

「マスター、やはり耳が・・・解剖の準備を行いませんと」

「いやいやいや、アテネ！申し訳ない！！空耳だった！！うん！！
空耳！！」

「そうですか・・・残念です・・・」

「アテネは俺を解剖したいのかい・・・勘弁してほしいんだけど・・・」

「マスターを解剖したいわけではありません。」

全てを受け入れただけです。そう、マスターの全てを」

「え、え、え・・・ま、まあ、なんだ・・・そ、そうだ！！」

ここは、いったいどこなんだい？」

「マスターに、ご説明を行っておりませんでしたね。」

大変申し訳ございません。ここはヴィーナス内部、マスター専用室
となります」

「????ヴィーナス????」

和也はアテネのいわれたことが理解できなかった

「はい、マスター。超巨大移動要塞ヴィーナス、いわゆる軍事基地
です」

「軍事基地・・・つまり、父さんの関係なのかな??」

「はい、お父上である、大蔵様のご命令で完成された、和也様の為の要塞となります」

「俺の為の?? いったいどういう事なんだ・・・」

父さんはどのように考えて俺にこのようなものを・・・

いやいや、考えても仕方ないか。聞いてみればわかる事だしね。

アテネ、父さんや母さんはどこにいるのかな？」

「大蔵様と佐代子様はお亡くなりました」

「えっ・・・どういう事・・・父さんと母さんが亡くなったなんて・

嘘でしょう・・・アテネ・・・」

和也はショックを受けつつもアテネに聞き返した

「申し訳ございません。大蔵様と佐代子様はお亡くなったのは真実でございます」

アテネは悲しそうに和也の質問に答えてた

「そんな・・・じゃあ・・・俺はどれくらい眠っていたの??」

啞然としつつアテネに質問を返す

「マスターが人体冷凍保存をされてから2000年ほど立っております。

現在は西暦4100年となります」

「は???? え・・・つまり、俺は2000年眠っていて、そこまで薬が開発できなかったということかな??」

和也は啞然とした表情でアテネに問いかける

「はい、正確には薬の開発が行えない状態が続きまして、

開発自体を後手にまわさないといけませんでした」

「開発が後手に・・・つまりイレギュラーな出来事が起こったと言
う事か・・・」

「はい、マスターのご想像通り、ある出来事が起きたために
後手にまわさないといけませんでした」

「ある出来事か・・・それは気になるな。

アテネ、いったいどんな事が起きたんだい？」

「それは・・・」

アテネは2000年の間に起きた

驚くべき事実を語り始めようと口を開いた・・・

第2話「俺は一体どこにいたんだ？」（後書き）

次回は和也の寝ている間に起こった事。

しかし、和也のいちゃぶまで長い・・・

早くハーレムにしたいのにな・・・

第3話「寝てる間になにがあつた？」（前書き）

ふむ・・・説明は難しいですね・・・
分子とかは流してくださいね・・・

第3話「寝てる間になにがあつた？」

「マスターが人体冷凍保存をされてからすぐでしょうか」

アテネは前置きのようにはじめ続ける

「マスターもご存じのとおり、地球温暖化問題で

二酸化炭素をどのように削減できるかを

各国の代表が集まり会議を行っておりまして。

しかし、削減の重要性をいくら訴えても

中国がそれを許さず、自国の要望のみを言い

まったく協力を行いませんでした」

アテネはため息を吐きながら続けた。

「しかし、日本人研究者『栗林 悟』氏が

ある研究を発表しました事により、

新エネルギーが開発されました」

明るい声でアテネが話す

「新エネルギー？それって温暖化となにか関係あるの？」

和也はアテネに問いかけた

「はい、これは二酸化炭素を使用したエネルギーです。

二酸化炭素を一つの器コナに閉じ込め

分子の活動を促すことによってエネルギーを発生させます。

詳しく説明を加えますとこのエネルギーは分子を

電気信号により活動を促し少しの信号で莫大なエネルギーを

生み出す事に成功しました」

アテネは一度話を切る。

「このエネルギーの開発により二酸化炭素の活用法が生まれ

大量に二酸化炭素のみを取り出す事で地球温暖化の抑制につながり

ました」

「なるほど・・・二酸化炭素のみ・・・酸素は外にだすのか・・・」

「はい、この画期的なエネルギーの開発で地球温暖化を抑制する事

に成功しました」

ここでアテネは和也と目をいつそう合わせる

「栗林氏の研究で見えられたエネルギーであるこれを

『永久ドライブ・栗林』通称『EDK』となくれました。

これにより全てのエネルギーを

EDKに切り替える事が各首脳会議で決定されました」

アテネは下を向いて話し続ける

「しかし、安易に永久的にエネルギーを生み出すことができる

EDKが開発された事により、各国で利権争いが勃発する事になりました。

また、この時期に以前から進められていたアンドロイド開発の目処が尽き、

エネルギーを小型化できるEDKを搭載させる事で起動に成功しました」

アテネが笑顔を浮かべた

「しかし、アンドロイド開発が成功したことで

大規模な世界戦争が行えるようになり

各国でアンドロイド同士での戦争が行われるようになりました」

「そんな中でアンドロイドを大量にかつ遠隔に操作する為に

アメリカの研究者リステインが発明した

アンドロイド遠隔装置と人工知能を兼ね備えた、

ジャステイスが発明された。

ジャステイスの導入によりアメリカが一拳に戦闘地域を広げていきました」

アテネは悲しそうな声を出しながら続ける

「アメリカはさらに戦闘地域を広げようとしたところ

ジャステイスがその判断を否定し独自の行動を行いました」

「ジャステインは人間がいるかぎり地球は守られないと

判断を下し、アンドロイドで人を攻撃しはじめました。

そうです、暴走を始めたのです」

「ジャステイスを破壊する為にアメリカ軍部が動き出したが人型アンドロイド以外に殺人マシン・バイオ兵器・生体兵器などをジャステインが開発し生産し始め、それで抵抗をしはじめた為、アメリカ軍部の作戦が失敗に終わりました」

「ジャステスはこれを機に衛星を通じて

各首脳国のコンピュータに侵入、コピーを行い

地球上の人間に対して攻撃をはじめました」

「この暴走により人類の50%が死に絶え

生き残れた人類はジャステイスに侵入されていない

コンピューターや兵器を使用しなんとか拠点になる

生存圏を守る事ができました」

「その拠点であるシティを安全に行き来できるように

また、ジャステイスが生産している敵に対抗するために

ハンター協会が設立されました」

「ハンター協会か・・・どこでもあるのかな？

というか・・・ゲームみたいな・・・」

「はい、そうです。確かにゲームみたいですが真実です。

ハンター協会は各シティにあります、

主に護衛やモンスター・危険性が高いモンスターに賞金を

かけてそれを討伐する事でゴールドを得る仕事となります」

「なるほどね・・・」

「以上が世界情勢となります。現在はハンター協会で

シティは守られています、いつジャステイスが

動くかわからない状態です」

「ジャステイスか・・・なるほど・・・流れは大体わかったんだけど

肝心の今乗っているヴィーナスの事が語られていないんだけど」

「もちろん、これからですよ。マスター、せっかちは女性にはモテ

ませんよ」

「ほっといてくれ！」

アテネは微笑を浮かべヴィーナスの事を語り始めようとさらに話を

続けようと口を開いた

第3話「寝てる間になにがあつた？」（後書き）

世界情勢はかけたかな・・・

つぎはやつと要塞だ！！

ヴィーナス！！はやく・・・ハーレムにしたい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1544z/>

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

2011年12月7日22時48分発行